

直交関数による気象諸量の場の表現方式が F.B. Muller らによって応用され、北半球規模での Westerlies についてその月々の変動における統計的諸性質が G.W. Brier によりとりあげられた。

第4 Session では主力が近代確率論の応用にこそが、I. F. Stuart により拡散過程の理論が短時間気象現象の解明に用いられたのをはじめ、極値に関する確率論的方法の水文気象(降雨-流出)への応用が C.K. Stidd により試みられ、たとえば変量  $X$  の正規化変換を  $X_c$  で行なうときの  $c$  の最も妥当なきめ方、確率紙上の Plotting 方式が検討された。その他気象現象の特殊な同時出現確率 (joint Probability) のモデルが J.T. McCabe らによつてつくられている。

つまり Statistical Methodology のセッションでは最近日ごましい発展をしている多変量統計解析法の気象への適用、確率論的考察、多次元時系列論の解析を電子計算機を利用して行なうなど、多彩な研究が発表されている。ここにかなり意欲的な試みがみられるのは、1. でのべたように統計数学の専門家がこの Statistical Methodology に関する集まりに入ってきて気象への積極的な応用を行なっているため、注目すべきではなからうか。

### むすび

以上、アメリカにおける第1回気象統計国内会議の大体の模様を簡単に紹介してみた。もちろん1つ1つの発表された論文内容は

Proceedings of the First Statistical Meteorologica Conference. Hartford, Connecticut 1968.

(May. 27~29). American Meteorological Society に掲載されており、筆者の手に一部あるので関心のある方は御連絡頂きたい。

日頃、筆者と文献交換をしている何人かの人がこの会議に参加し、部分的には理解しがたい結論も出されているが、たしかに日本の気象統計とはちがった面が見うけられる。たとえば日本でも乱流拡散などの面で、統計的手法が有効に用いられていることは周知の事実であるが、こうした面はこの会議ではあまり見受けられないようである。ともかく、研究の目的を明確にし、それに適合した統計的手法を効果的にとり入れてゆくためにも、研究交流が一層盛んになることが望ましい。その意味で、アメリカにおける気象統計の特徴的テーマが集約されているこの会議の模様をここに紹介した。

## 日本気象学会推薦による次期日本学術会議会員立候補者の 選出に関する選挙について

### 開票の結果は下記のとおりです

なお、北川信一郎氏は立候補者に推薦されましたが、本人の意志で辞退されましたので立候補氏名から除きました。

また、日下部正雄氏も立候補に推薦されましたが、本人の意志で辞退されました。しかし、日下部氏の辞退は投票用紙発送後でしたので、これを取消す時間的余裕がなかつたことを申し添えます。

総投票通数 1208通

(ただし通について名3連記の方法によりましたので、総投票数は3624票です。)

当選 神山 恵三 598票  
当選 三宅 泰雄 435〃  
当選 高橋 浩一郎 431〃

山本 義一 357〃  
吉武 泰二 331〃  
北岡 龍海 304〃  
青木 滋一 219〃  
今井 一郎 200〃  
小倉 義光 199〃  
日下部 正雄 166〃  
寺田 一彦 153〃  
礎野 謙治 152〃  
北川 信一郎 6〃  
白 票 73〃

昭和43年7月17日

日本気象学会選挙管理委員会